

〔論文〕

キリスト教主義学校の建学の精神の世俗化に関する一考察

——マックス・ヴェーバーのBeruf概念を手掛かりに——¹⁾

文 禎 顯

名古屋学院大学経済学部

要 旨

今日キリスト教の伝道停滞とキリスト教徒の人口減少の影響で、キリスト教主義学校におけるキリスト教徒の教職員と学生の割合は低く、世俗化の波はますます強くなっている。そのため、キリスト教主義学校において宗教的背景をもつ建学の精神を現代的に実現していくことは当面の課題であろう。本研究ではマックス・ヴェーバーが理解したルターのBeruf（天職）観念から生まれてきたプロテスタントの現世肯定の精神を手掛かりに、現代キリスト教主義学校におけるキリスト教精神の現代化（肯定的な世俗化）の具体的な一例、すなわち非キリスト教徒の教職員にまでプロテスタントの肯定的な世俗化の解釈を押し広げることによって、キリスト教主義学校におけるキリスト教的職業観の確立の可能性を示すことにする。

キーワード：マックス・ヴェーバー，Beruf（天職），キリスト教主義学校，建学の精神，世俗化

A study on the secularization of founding spirit of christian school

——Based on Max Weber's concept of Beruf——

Jungho MOON

Faculty of Economics
Nagoya Gakuin University

1) 2019年9月9日に行われた日本基督教学会第67回学術大会で発表したものに少し手を加えた論文である。

発行日 2020年10月31日

1. はじめに

今日キリスト教の伝道停滞とそれに伴うキリスト教徒の人口減少が目立つ。当然キリスト教主義学校においてもキリスト教徒の教職員と学生の割合は低く、世俗化の波はますます強くなっている。それが一つの原因であろうが、キリスト教主義の学校において、キリスト教精神または宗教的背景をもつ建学の精神を現代的に実現していくことは以前より難しい課題である。

明治時代、内村鑑三は名古屋学院大学²⁾の前身名古屋英和学校で教鞭をとっていた頃、建学の精神「敬神愛人」の具体化(現代化)のために「祈りつつ働き、感謝しつつ学ぶ」というスローガンを掲げ、学生指導に当たっていた³⁾。それに対し、名古屋学院大学の建学の精神の現代的な意味を説いた最新のものは、おそらく2019年現在大学ホームページに掲載のものであろう。そこでは建学の精神「敬神愛人」について、「敬神」は自分という存在を含むすべてに対して謙虚な姿勢で「学ぶこと」(Learning)、「愛人」は人を愛する方法として「与えること」(Giving)を意味するとある。

本研究ではキリスト教主義学校において教職員の職業観にプロテスタント精神を反映することによって、キリスト教精神の現代化の具体的な一例を示すことを目的とする。そのため、マックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神⁴⁾』(以下、略して『プロ倫』)の中のBeruf(天職)観念に示されるプロテスタント精神に着目する。宗教改革により生み出されたこの精神は、世俗的職業に対して神の召しを認めることによって誕生した現世肯定の精神または肯定的な世俗化の精神といえる。これはもともと洗礼を受けたキリスト教徒にのみ当てはまるもので、非キリスト教徒はその対象ではなかった。それに対し、本研究においては肯定的な世俗化の解釈をさらにキリスト教主義学校の非キリスト教徒の教職員にまで押し広げ、キリスト教的職業観の確立の可能性を探りたい。

2. 世俗化の問題：聖と俗の狭間で感じるジレンマ

キリスト教主義の伝統に立脚した建学の精神の実現に立ち足る障害物としては、差し当たり、次の二つのことが挙げられるのではないだろうか。一つはキリスト教主義学校において聖の領域(建学の精神とキリスト教的要素)に対して俗の領域(非キリスト教的要素)が巨大化していく事態、いわゆる世俗化の現象である。もう一つは聖と俗の狭間で感じる非キリスト教徒の教職員のアイデンティティの不確かさである。

建学の精神の実現を難しくするこの二つの問題のうち、まず前者の世俗化の現象について少し考え

2) 2020年現在筆者は名古屋学院大学に在職中である。

3) 藤巻孝之「内村鑑三の教育精神」『名古屋学院論叢』二、1993、156-162頁。

4) 橋本努『解説ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、講談社選書メチエ、2019、17-18頁。『プロ倫』の前半は1904年、その後半は翌年に発表される。のちに大幅に加筆修正されて1920年に『宗教社会学論集』第一巻の一部として刊行される。参考までに、最近出版された橋本氏の著書は今まで日本国内にはなかったとされる『プロ倫』の解説書であるが、橋本氏は『プロ倫』の全体像に近づき、そうすることによって現代にも通用できる意義を模索している。

てみよう。学校における世俗化現象は、キリスト教徒の教職員の比率の低下、学生の教会離れ、世俗的な名門校化、受験校化、ミッションスクールらしい雰囲気希薄化などの例で説明される場合もある⁵⁾。金子晴勇氏は違った角度から世俗化について述べている。氏によると、世俗化とは、中世社会から近代社会への発展において認められる現象で、それには三つの次元があるという。一つ目は国家の公権力から宗教が解放されること（政治的な世俗化）、二つ目は神を最高価値とする世界観から学問的にも信教的にも自由になること（知的な世俗化）、三つ目は宗教の信仰から個人が離れていくこと（個人的な世俗化）である⁶⁾。これらの三つの次元をキリスト教主義学校に当てはめるなら、政治的世俗化としては学校経営の中心から建学の精神の宗教的価値が遠ざかっていくこと、知的な世俗化としては教育や研究において建学の精神の実現への意識が薄れていくこと、そして個人的な世俗化としては建学の精神を身につける必要性を感じる教職員や学生数が減少していくことがそれぞれ言えるかもしれない。今後もこのような世俗化の勢いは増していくと予想される。その中でどうすれば押し寄せてくるその波におぼれず、宗教的な価値を生かした建学の精神の現代化を可能にすることができるのか、思い悩む学校関係者は少なくないであろう。

次に、建学の精神の実現を困難にするもう一つの問題として、聖と俗の間に挟まれた非キリスト教徒の教職員のアイデンティティの不確かさについてである。洗礼を受けたキリスト教徒の教職員が100%を占める学校であれば、クリスチャンとしてのある程度明確なアイデンティティをもって建学の精神の実現に励むことができるであろう。しかし、現実ではほとんどの教職員がキリスト教徒ではないために、聖書の精神に基づく建学の精神を活かし、それを現代的に具体化する明確な方法論を示すことは容易ではない。ただし、そのような非キリスト教徒の教職員といえども、キリスト教主義学校に所属している限り、彼らはその建学の精神に一定の理解を示しその実現に何らかの形で携わることが求められている。その意味で、彼らは俗に属していると同時に聖にも部分的に関わっているといえよう。その場合に彼らにとって問題となるのが、聖と俗の狭間におけるアイデンティティの不確かさである。元来建学の精神の実現は、すべての教職員による総力を挙げた取り組みによってこそ成果が見込まれるものと考えられ、したがってこうした非キリスト教徒の教職員のアイデンティティの問題に対し適切な位置づけを模索することは、キリスト教主義の学校において大事な課題であると考えられる。

以上のように建学の精神の実現を妨げる問題として、世俗化現象と、聖と俗の挟間で感じる非キリスト教徒の教職員のアイデンティティの不確かさを取り上げた。こうした問題に対し、本研究では問題解決への第一歩としてまず世俗化現象ということの意味を積極的に評価するという方向性で考えていくことにしたい。そもそもプロテスタントの歴史において、世俗化は宗教改革という母胎から生まれた善き子供として肯定される側面がある⁷⁾。そして宗教改革以降、プロテスタンティズムにおいて聖と俗の関係は、「聖と俗の統合と調和」、「俗から聖への変貌」、「聖によってもたらされる俗の価値

5) 「キリスト教学校教育におけるキャンパス・ミニストリーの役割と位置づけ」『キリスト教学校の再建—教育の神学第二集』（学校伝道研究会編）、聖学院大学出版会、1997、235頁。

6) 金子晴勇『近代人の宿命とキリスト教—世俗化の人間学的考察』、聖学院大学出版会、2001、33-37頁。

7) 同上、30、31、38、39頁。

の肯定」として肯定的に評価されてきたことがある⁸⁾。このような肯定的な側面はプロテスタント的職業観念において明確に示されている。つまり宗教改革者ルターを通してプロテスタント信徒たちの職場（俗の領域）は、信仰や隣人愛の実践の場（聖の領域）としても肯定され、聖化されさえるようになるのである。トレルチによると、このような変化こそがヨーロッパのプロテスタント的諸国民とヨーロッパ史全体に対するプロテスタンティズムの高い文化的意義の一つだとされる⁹⁾。

3. Beruf 概念：宗教改革前後の職業理解の変化

本研究ではルターによってもたらされた肯定的世俗化現象としてのプロテスタント的職業観念を現代のキリスト教主義学校に適用することを試みるが、そのためにはルターによって天職の意味として使われるようになったドイツ語ベルーフ（Beruf）という言葉の概念とその概念に含まれている世俗化の意味について理解しなければならない。

封建領主によって支配された中世の社会・国家・政治はカトリシズム的な「キリスト教共同体」の理念によって特徴づけられていた。その中世は全体として、キリスト教の影響の下で、個人の自由と平等の思想が育てられる。民主制や社会契約や自由意志といった近代的な理念がこの時代にすでに主張されていた。このような近代的な理念は次の時代にいっそう進展し、「キリスト教共同体」の終焉を促す¹⁰⁾。

中世は身分秩序の社会であったが、全体的に教皇を頂点にする「支配階級」、修道士たちの「僧侶階級」、農民をはじめとする「労働階級」の三種類に構成される¹¹⁾。職業も上下の階層秩序のなかに組み込まれ、世俗の職業は低いものとして蔑視された¹²⁾。すべての職業は神の意志による宿命的なものとして理解されたが、世俗的な職業は神によって定められたものであるとしても召命（vocatio）で

8) エルンスト・トレルチ著『ルネサンスと宗教改革』、岩波書店、1962、41-48頁。宗教改革は、中世の祭司的・僧侶階級的な統治や支配から根本的に現世的生を解放し、現世の生活とくに現世的職業を信仰や隣人愛の実践の場として、健全なキリスト者としての自己訓練の手段や形式として位置づけ、そうすることによって、プロテスタントの職業観念にまったく新しい意味を与える。このような宗教改革の現世肯定について語る際、現世的職業においてこの世界を克服しようとする強靱な心と宗教的兄弟愛が現れ、この現世の職業体系において宗教倫理が実践、実施されるということに現世肯定の本質があるという。本論文で論じる聖と俗との関係というのは、トレルチのこのプロテスタント的現世肯定の理解に基づいたものである。

9) 同上、167-179頁。現世における世俗労働の宗教的聖化以外にも、プロテスタンティズムがヨーロッパ史に対してもつ一般的な文化的意義には、プロテスタンティズムによってはじめて国民的諸国家の独立と国民的文化の独立が徹底的に推し進められたことや、伝来の旧習を徹底的に批判しながら良心の確信を各人がみずから親しく内面的に把握するという宗教的個人主義が強調されたことも含まれる。

10) 金子晴勇「職業と社会」『ルターを学ぶ人のために』（金子晴勇・江口再起編）、世界思想社、2008、178-180頁。

11) 同上、金子晴勇「職業と社会」、182頁。

12) 同上、金子晴勇「職業と社会」、184頁。

はなく、召命は修道士に関わるものであった¹³⁾。中世末頃神秘思想家タウラーによって修道士の召しとともに世俗的職業の召しも認められるようになるが、ただしそこでも前者が後者より高く評価される。このような差別はルターとほかの宗教改革者たちによって廃棄されるようになる¹⁴⁾。

ルターは救いにつながる信者の生活において信徒になる霊的召命 (*vocatio spiritualis*) と世俗的地位や職業に勤める外的召命 (*vocatio externa*) を分離しがたいものとして理解する¹⁵⁾。彼において召命 (*vocatio*) は、職務・公務 (*officium*) とともにベルーフ (*Beruf*) という言葉の中へ統合されるようになる¹⁶⁾。ベルーフという語はすでにルター以前にも存在し、「召し」や「評判」の意味で使われていた。またそれは、中世後期には *vocatio* や内的 *Ruf*, *Stand* や *Arbeit* と関連づけられていた。ところが、ルターをとおして觀念の完成 (世俗的職業における召命 (天職)) にいたるのである¹⁷⁾。世俗的職業における神の召命を認めるルターのベルーフ概念は、とくにルターの聖書翻訳¹⁸⁾ (ヴェーバーの『プロ倫』 (中山訳) 129-142 頁を参照。ルターは新約聖書において永遠の救いへ召されるという宗教的な意味をもつギリシャ語 *κλεις* をベルーフと翻訳し、旧約聖書の外典においては労苦な業という世俗的な意味をもつギリシャ語 *πονος* をベルーフと翻訳する) を通して示される¹⁹⁾。このようなベルーフの聖書翻訳に表れるルターの精神の影響によって、多くのプロテスタント国の聖書翻訳においてもベルーフのような両義的意味 (職業と召し) をもつ言葉がそれぞれ採用されるようになる²⁰⁾。ルターはこの聖書翻訳を通して世俗の職業を神から与えられた天職とみなしこの天職に各人が召されるという思想を広めたが、彼の宗教改革によってドイツではほとんどの修道院が崩壊するとともに、聖職と世俗の職業との区別が撤廃される。そうして世俗的職業の義務の遂行を道徳の最高内容としてみなし、世俗的な日常労働に宗教的な意義を認める思想が生まれてくる。このような事態は、修道士的善行 (功績) を否定する彼の中心思想である信仰義認 (「信仰によってのみ」 (*sola fide*)) から直接導き出されたものである²¹⁾。

ルターのベルーフ概念はその後カルヴァン派の人たちによって継承される。このベルーフ概念はカ

13) W. Conze, "Beruf", in *Geschichtliche Grundbegriffe: historisches Lexikon zur politisch-sozialen Sprache in Deutschland* (Bd. 1.), Stuttgart: Klett-Cotta, 1984, p. 492.

14) Ibid., p. 493.

15) Ibid., pp. 493-494.

16) Ibid., pp. 490, 492.

17) Ibid., p. 490.

18) 大村眞澄「M・ルターのBeruf概念」『マックス・ヴェーバー「倫理」論文を読み解く』(キリスト教史学会編), 2018, 49頁。大村氏は、これらの聖書翻訳に関してヴェーバーが『プロ倫』で論じていることに対して批判的な見解を示しながら、ルターの聖書翻訳ではなく彼の思想全体からルターのBeruf概念を捉えようとする。ルターのBerufは内的召命 (*Berufung*) と外的召命 (*Beruf*) としての労働が一体となったものであるが、このBerufという言葉には職業という意味が与えられていないという。ルターのBeruf論については注4の資料276-280頁を参照せよ。

19) Cf. W. Conze, op. cit., p. 493.

20) Ibid., p. 491.

21) 金子晴勇 (2008), 前掲書「職業と社会」, 184頁。

ルヴィニズム信仰が受け入れられていたオランダ、イギリス、フランスなどの西ヨーロッパにおいて、神の栄光と予定論（救いの確証）の教義を強調するプロテスタントたち、とくにカルヴァン派から出たイギリスとニューイングランドのピューリタンたちの禁欲主義的職業倫理と近代資本主義の精神の誕生に間接的に関わることになる²²⁾。

以上、ルター前後の時代においてベルーフというドイツ語の意味合いの変化を通して、世俗化の過程、すなわちもともと中世時代に神の召しとしてみとめられなかった世俗的職業に召しという宗教的意義が付与される一連の過程を概観した。このような世俗化の過程は、新しいキリスト教的職業倫理と世俗的文化の誕生に関わるという意味で評価に値するであろう。

4. ルターのBeruf理解とキリスト教主義学校における肯定的世俗化の可能性²³⁾

このような文化的な意義をもつルターのベルーフ理解を、本章ではマックス・ヴェーバーの『プロ倫』を通して顧みる。そしてその理解を手掛かりとして、キリスト教主義学校における肯定的世俗化の可能性、つまり教職員の職務（俗の領域）にキリスト教的要素（聖の意味）を付与し、キリスト教的職業観を確立する可能性を探る。

4.1. 職業における神の召命

①神から与えられた使命としての職業

ヴェーバーによると、ドイツ語ベルーフ（Beruf）はルター以前は召し²⁴⁾（Ruf）の意味で使われており、もともとこの語には世俗的職業という概念はなかったという。ところが、ルターの聖書解釈によってベルーフは神の召しと世俗的職業の意味をあわせもち²⁵⁾、近代的な意味での天職、すなわち神によって与えられた使命（Aufgabe）としての職業という宗教的な観念を含むようになる。それ以降、英語のコーリング（calling）のようにこのベルーフに相当する多くのプロテスタント系民族の言葉が

22) 岡澤憲一郎『ヴェーバーの宗教観—宗教と経済エートス』、御茶の水書房、2018、3-41頁。

23) この第4章で参考にした『プロ倫』の原文は次のD. Kaeslerによって編集されたものである。Max Weber, *Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus*, München: C. H. Beck, 2004. そして、中山訳（日経BP社、2010）と大塚訳（岩波書店、2012）に頼りながら私訳を試みた。

24) 中世では聖書の召しを意味するギリシャ語クレシスはラテン語vocatioに訳されたに違いないが、召命の意味をもつこのvocatioには世俗内的な意味が欠けていた（『プロ倫』原文、126頁）。この語は、伝統的なラテン語においてはとくに修道士や聖職者としての召しにかぎって使われていた。この召命の教義をプレッシャーとして感じていたルターにおいて召命は世俗内的職業労働（innerweltliche《Berufs》-Arbeit）の意味合いをおびるようになるのである（『プロ倫』原文、130頁）。

25) Berufやcallingには日常的な世界における職業という意味のほかに、神の召命、使命などの観念がともに含まれている（岡澤憲一郎、前掲書、11頁）。宗教的な観念がBeruf（職業）に含まれているため、世俗的職業を神から与えられた「天職」とみなし、この天職に私たちは召命されているという宗教的な職業理解をもつのである。（金子晴勇、前掲書「職業と社会」、184頁。）

使われはじめる²⁶⁾。

②この職業観におけるプロテスタンティズムの中心的な教義

ヴェーバーは、神によって定められた使命としての職業においてすべてのプロテスタント教派の中心的な教義が表れるという。すなわち、a. 各々の生活の立場から生じる世俗内的義務を実現していくことが、神の意志（Wille）であり、神を喜ばす唯一の道（手段）である（当時のカトリック教会の修道士の禁欲の否定²⁷⁾）。b. この世俗内的義務の実行こそが天職（Beruf）であり、各人の天職は神の前で全く平等である。c. 天職（世俗的職業）の実現は最も価値ある道徳的行動として評価される、ということである。ヴェーバーはこれらの点がベールフ概念のまったく新しい側面であり、宗教改革の一つの産物だと主張する²⁸⁾。

③Beruf概念の非キリスト教徒への適用の根拠

プロテスタントの中心的な教義を含意するベールフ概念を、現代のキリスト教主義学校の非キリスト教徒の教職員に対して適用する際に必要な根拠は上記のヴェーバーの議論から得られるであろう。それは次のようにまとめられる。a. 世俗の秩序は神によって作られ、この秩序の中には社会的身分の秩序も含まれる（『プロ倫』原文135-136頁（注73））。b. 世俗の秩序、特に客観的な歴史の秩序には神の意志が現れるため、その秩序の中に置かれている各人の地位も神の意志の現れとしてみなされる（『プロ倫』原文、101頁）。c. 当然、神によって作られた世俗の秩序の中で非キリスト教徒が自分の地位においてその職務（officium）を真面目に果たすことは自然法的徳（Tugend lege naturae）として神を喜ばすことになる²⁹⁾。

④非キリスト教徒の教職員の職務における召命意識の可能性

このように、神によって作られ、神の意志が表現されるところの世俗の秩序の中に非キリスト教徒の職業も位置づけられるという点、およびキリスト教主義学校がキリスト教的精神（建学の精神）の実現に関わっているという点をふまえると、非キリスト教徒の教職員は、基本的に次のような職業意識をもつことが可能であろう。a. キリスト教の信徒としての召しとは教義的な意味合いが異なると

26) 『プロ倫』原文、96-97頁。ルターによって創造されたBeruf（天職）は、最初はまったくルター派のものであった。その後、カルヴァン派の人たちは救いの確証への関心を前面に押し出したあの発展の結果としてはじめて、ルター派のBeruf概念を受け入れ、明確に強調するようになる。このようなBerufの概念は、16世紀にすでにキリスト教外の文献の中にも定着する（原文、130頁）。この天職の意味は英語のcallingという語により明確に示されているが（原文96-97頁）、1539年のクランマーの公式的英訳聖書がBeruf（= trade）の意味で用いられるcallingのピューリタン的概念の起源だといわれる（原文、131頁（注56））。

27) エルンスト・トレルチ著、前掲書、181頁。トレルチによると、独身と修道士の功績の否定には結婚と家族的機能の肯定が隠れているという。

28) 『プロ倫』原文、97-98頁。

29) 『プロ倫』原文、137頁（注76-77）。

しても、キリスト教主義学校の教職員は自分の仕事や職務を神から与えられた使命（ミッション）として考える。b. 神によって召され、使命が与えられることを神の選びとして捉える聖書的思想³⁰⁾に学んで、非キリスト教徒の教職員は、神から与えられた使命のために自分が神に選ばれ、その職務へ導かれたというよりポジティブな姿勢に至る。c. このような姿勢で自分の使命を果たすことが神を喜ばす神の意志であり、道徳的価値をもつと受け止める。

4.2. 職業に含まれている隣人愛

次に、教職員のキリスト教的職業観の確立において欠かせない要素の隣人愛について考えたい。ルターにとって世俗的職業は、神の選びと召命の場と同時に、隣人愛の実践の場³¹⁾でもある。

①世俗的義務を果たすことが隣人愛の実践であり神の恩寵に対する答え方である

ヴェーバーによると、ルターの目に映った当時の修道院生活は世俗的義務を放棄するものとして愛のない利己主義の産物を意味した。それに対し、隣人に対する伝統的な世俗的義務というのは、隣人愛の掟として命じられるものであり³²⁾、世俗において行われる職業労働は隣人愛の外的な表現であるという³³⁾。これは隣人愛によって世俗的労働が動機づけられるということである。このような隣人愛は神の愛と恩寵に答える具体的な方法として捉えられる（『プロ倫』原文、132頁（注59））。

②ルターの職業における隣人愛理解の問題

ヴェーバーによると、神の恩寵に答える方法として職業において隣人愛を行うというルターの職業観は、信仰と愛のとても緩い結合である³⁴⁾。それだけでなく、当時の分業体制は個々人をして他者のために働くように強制させることになる³⁵⁾。このように職業における隣人愛の理解は、非現実的な土

30) 沢崎堅造『キリスト教経済思想史研究：ルーテル、カルヴァン、聖トマス、アウグスチヌス研究』、未来社、1965、43-45、54-55頁。旧約聖書（預言者と祭司）の神の召し（神の選び）は神に遣わされるという動態的な意味をもつものに対して、新約聖書（特にパウロ）は与えられた地位や身分や職務のままにあるという静態的な意味を持つ。ルーテルのBerufの根底においてもこのような聖書の召命・選びの思想は深く存在するが、彼の場合は新約聖書的な静態の意味での神の選びと関わる。ルーテルのBerufは、そのように著しく静態の意味をもつため、積極的に世俗的職業への活動、精進をすすめたものではないという。

31) 金子晴勇（2008）、前掲書、186-187頁。ルターの隣人愛は神によって定められている各人の社会的地位（身分と職業）に応じて具体的に実践されていたが、そのさい、ルターでは「諸身分」（Stände）は中世的・伝統的な階級秩序を意味せず、高低の区分のない機能的な「職分」（Werk）や「役目」（Amt）だという。

32) 『プロ倫』原文、135頁（注70）。

33) 『プロ倫』原文、98頁。

34) 『プロ倫』原文、132頁（注59）。

35) 金子晴勇（2008）、185-186頁。金子氏は、アダム・スミスは経済の分業活動を自己愛に基づく交換に帰しているのに対して、ルターはそれを隣人愛の強制に見ているというヴェーバーの解釈が皮相な解釈だと指摘しながら、自己愛に立つ分業と競争が「見えざる手」によって導かれるという楽観的な観念はルターにはないと指摘する。

台のうえに基礎づけられたものとしてじきに消え去るようになるという³⁶⁾。

③ルターの隣人愛の前進としてのカルヴァン派の倫理体系

隣人愛から分業における体制的な職業労働が生み出されるというルターの理解は、いまだ不確実で思想的萌芽の段階にとどまるものであった。ところが、近代資本主義の精神の誕生に直接関わることになるカルヴァン派において職業における隣人愛は倫理的な体系の特徴をもつようになる。しかしここではひたすら神の栄光が優先されることによって、隣人愛は被造物のためではなく神の栄光のために行われるべき掟として非人格的な特徴を帯びてしまう（中山訳223-224, 231頁）。

④非キリスト教徒の教職員の職業における隣人愛の可能性。

上記のヴェーバーの説明から、そして、キリスト教主義学校の宗教的背景から以下のようにキリスト教の隣人愛を非キリスト教徒の教職員の職業観に活かすことができるであろう。a. キリスト教主義学校では、キリスト教精神に基づいた学生の人格陶冶という明確な教育理念が教職員の職務の中に据えられているため、職務の実行は学生に対するキリスト教的愛、すなわち隣人愛の行為としてみなすことができる。b. こうした職場において、建学の精神を尊重し、神の召命を信じ、それを快く受けとめようとする教職員には、職業を隣人愛の外的な表現と捉えるルターの理解は受け入れられうる。c. ただし、この隣人愛は他者のために強いられるものになってはならない。教職員の隣人愛は自分の自由なる意志から出てその職務の中へ注ぎ込まなければならないものである。ルターの表現を借りれば、キリスト教的隣人愛は自由なる君主の高さから奉仕する僕の低さへのへりくだりとして現れるものである。このような自由で謙虚な隣人愛によって新しい社会（学校共同体）の誕生が期待される³⁷⁾。d. ルターの隣人愛に対するヴェーバーの批判にもあったように、職場における隣人愛は、職業とキリスト教精神（愛）の緩い結合によって形式的なものへと変わりやすいかもしれない。一方ではこの学校の職務に自分を召命された神の恩寵に答える方法として、そして隣人愛の表現としてその職務を果たすという意識転換は実現可能なものと考えられる。

4.3. キリスト教主義学校における世俗化の肯定的意義

ルターのBeruf概念から示されているように、宗教改革によってもたらされた世俗化の肯定的意義や現世肯定の倫理はプロテスタンティズムの根本精神である³⁸⁾。プロテスタント系キリスト教主義学校に属する教職員がその精神を受け継ぎ、発展させていく方法の一つは、まさに召命意識をもって自分の職業に愛を注ぎ込むことにより、その職場を聖の領域とみなすことであろう。これは例えば筆者が属している名古屋学院大学建学の精神「敬神愛人」の現代化に適用できると考えられる。このよう

36) 『プロ倫』原文、98頁。

37) 金子晴勇（2008）、187-188頁。金子氏は、ルターの『キリスト者の自由』における隣人愛を紹介する中、「信仰により自由の高所に昇ったキリスト者は僕として愛の奉仕にいそむ。自由の高さから愛の低さに下ることの落差こそ信仰の力」であると強調しながら、ルターによって新しい社会が生まれてきている点に注目する。

38) エルンスト・トレルチ著、前掲書、41-43, 175頁。

に俗と聖の調和や肯定的な世俗化の実現に励むことによって、プロテスタント系キリスト教主義学校はキリスト教離れの世俗化が進む中でもその名にふさわしい在り方を維持・発展させる術を身につけることができるようになるであろう。

5. 肯定的世俗化に立ちはだかる二つの問題

以上のようにキリスト教主義学校における世俗化は、神の召命と隣人愛というプロテスタントの中心的教義を含んだキリスト教的職業観を確立することによっては一定の成果を得るかもしれない。しかし、世俗化を肯定的に実現していく過程には次の二つの問題が浮上すると考えられる。一つは、心理的駆動力の問題であり、もう一つはプロテスタンティズムの影響による否定的な側面の問題である。引き続きこれらの問題について論じる。

まず、心理的駆動力の問題である。これは、非キリスト教徒の教職員が自発的にキリスト教的職業観念を身につけるように突き動かす「心理的駆動力」（「心理的起動力」大塚140-141頁）をどのような方法で引き起こすかという問題である。歴史的にはドイツの国家主導の「重商主義の経済倫理」に結び付いたルター派の「禁欲倫理」および「天職の概念」は、信徒たちが権威に従順しながら勤勉に働くように心理的駆動力を与えたと推測できる（橋本努207-208頁，172-174頁）。そして、個人本位の「資本主義の精神」に結び付いたカルヴァン派の「二重予定説」は信徒たちが生活全般を方法的に合理化していくように、そして、カルヴァンから影響を受けた洗礼主義の諸教派の「信団形成」は信徒たちが自発的に社会を変革するように、それぞれの「心理的駆動力」を提供したといわれる（橋本努139-142，206-207頁）。とくに「二重予定説」によって心理的駆動力を与えられた禁欲のプロテスタンティズムは「禁欲のプロテスタント天職倫理³⁹⁾」を体系化していくが、その天職倫理は救済の確信を得る最も優れた手段が労働であると信じることで生じる心理的駆動力を生み出す。こうしてプロテスタントの人たちは、救いの確証を得るためにひたすら働き、無駄遣いをしない生き方を確立していくのである（橋本努229-230頁，大塚訳339，359-360頁）。上記に取り上げたプロテスタントの各派の天職意識に見られるそれぞれの心理的駆動力に共通するものは、「魂の救済」であるに違いない。『プロ倫』の中でヴェーバーは、宗教改革の指導者たちの生涯と行いの中心が「魂の救済」であるというが、「魂の救済」への強い願望はその後続く。ところが、アイロニカルに、魂の救済という純粋に宗教的な動機を基礎とするプロテスタンティズムの倫理は意図せざる結果として資本主義の精神を生み出すのである（中山訳176頁，大塚訳133-134頁，橋本努250頁）。もともとルターのベルーフ観念に欠かせないのが「魂の救済」という心理的駆動力の意味である（橋本努119頁）。トレルチも、世俗的職業を隣人愛の実践の場と考えるプロテスタンティズムの現世肯定は峻厳なる罪観念と確信不動の来世観に深く根ざしているということ⁴⁰⁾、「魂の救済」の意義を強調する。キリスト

39) 橋本努，前掲書。橋本氏は、「禁欲のプロテスタンティズムの倫理」と「禁欲のプロテスタンティズムの天職倫理」の違いを明らかにする（205-218頁）。

40) エルンスト・トレルチ著，前掲書，40，43頁。

教的天職観の確立を通して現代のキリスト教主義学校における肯定的世俗化の実現を考える際、その心理的駆動力をどのような方法で引き起こすか、という問いは避けられないが、その問いに対する答えは、「魂の救済」を現代に合った形でキリスト教的天職観の中に位置づけられるかどうかに関わっているかもしれない。

次は、プロテスタンティズムの影響の否定的な側面に関する問題である。例えば生産性重視による人間尊厳の墜落などプロテスタンティズムが資本主義に与えた否定的な影響をどのように克服していくかという問題である。トレルチは、プロテスタンティズムがヨーロッパ史の全体に対してもつ肯定的な側面として高い文化意義、つまり国民的諸国家の独立と国民的文化の独立、宗教的個人主義、世俗労働の宗教的聖化という一連の流れをつくっていくことをその肯定的側面として評価する⁴¹⁾。それに対し、エーリッヒ・フロムはプロテスタンティズムの肯定的な側面のみならず、その否定的な側面にも注目する。彼は、中世社会には近代的な意味での個人的自由（選択の自由）が欠如していたとしても、その社会的秩序の中で各人は明確な役割を果せば、安定感と帰属感とが与えられていたという⁴²⁾。そして、それと対照的なものとしてプロテスタンティズムとそれに影響された近代資本主義の否定的な側面を明らかにしようとする。彼によると、中世的社会組織の崩壊後、プロテスタンティズムによって個人は中世社会の伝統的な絆（束縛）から自由となり、独立の新しい感情を与えられるとともに、同じくプロテスタンティズムから資本主義の近代的生産組織のもとで果たすべき役割に対する心理的な準備をも与えられたという（エーリッヒ・フロム 120 頁）。彼が述べる、資本主義に対するプロテスタンティズムの否定的な影響に関する主な内容を以下に簡単に紹介しよう。ルターの信仰の意味やカルヴァンの救済の確信は主観的な性格を帯びているが、彼らの教えから分かるように、プロテスタンティズムの教義にしたがう個人はただひとり神の前に立ち、完全な服従によって救済を求めざるを得ない孤独な存在である。このような神に対する個人主義的な関係は、人間の世俗的活動における個人主義的な性格に対して心理的準備となる（同上 125 頁）。特に罪悪性という人間存在の否定的な側面を強調するルターとカルヴァンの教えによって、人間は自分自身の存在が無意味であると感じつつ、神の栄光という目的の手段になって、ひたすら自己の生活を服従させようとする心構えをつくるが、それは人間が経済的機械（または一人の指導者）に対する召使の役割を受け入れるようにした準備段階であった（同上 128, 130 頁）。実際のところ、経済的活動や成功や物質的獲得を目的とする資本主義において、資金をもっていない人間は超人間的な経済的目的のための道具となり、巨大な経済的機械の歯車となってしまう（同上 127, 130 頁）。こうして道具となった人間は、自分自身を無意味で無力なものと強く感じ（同上 135 頁）、ますます孤独で、孤立した、途方にくれた不安な個

41) 同上、168-178 頁。古プロテスタンティズムがヨーロッパ史の全体に対して持つ三つの高い文化意義が次の三つの流れに帰着するという。①プロテスタンティズムによってはじめて徹底的に国民的諸国家の独立ともろもろの国民的文化の独立（例えば自分たちの国家教会（LandesKirche）の宗教的独立）に至る。②従来の旧習を徹底的に批判することと関連しつつ個人が信仰をみずから確信するという宗教的個人主義（例えば、批判や改革を行い個人的確信にもとづく感情や良心の内面性を重んじるプロテスタントの基本的態度）が生じる。③現世において隣人愛の実践によって世俗労働の宗教的聖化をもたらす。

42) エーリッヒ・フロム著・日高六郎訳『自由からの逃走』、創元新社、1965、52-53、126 頁。

人となる（同上137頁）。この不安を抑え、埋め合わせるために、財産や名声や権力を自我の一部として求めるのである（同上137-138頁）。このように、フロムが語るプロテスタントの資本主義に及ぼした否定的な側面、すなわち道具化された無力で無意味な個人、孤独で孤立した不安な個人の問題をどのように克服していくべきか、というのは、プロテスタント系キリスト教主義学校における肯定的世俗化を考える際、想定すべき問題であろう。そして、この問題に対するキリスト教的答えは、資本や権力や名声といった世俗的な次元を超える一種の「魂の余暇」から得られるかもしれない。

この章ではキリスト教的職業観の確立によってキリスト教主義学校における肯定的世俗化を実現していくなかで、想定される二つの問題、すなわち心理的駆動力の問題と、プロテスタンティズムに起因する資本主義の否定的な側面の問題について考察した。これらの問題が解決されない限り、キリスト教的職業観は教職員の間で一つの理念として定着し実践につながることは難しいであろう。

6. 肯定的世俗化の実現のための具体的な提案

ここではキリスト教主義学校におけるキリスト教的職業観の確立に役立つ提案として、「魂の救済」と「魂の余暇」、もう一つ加えて、新しい学問領域として「職業学」（仮名）の構築について議論する。

①「魂の救済」への関心：心理的駆動力としての可能性

ルターによって新しく生まれ変わったベルーフ（Beruf）という語にはもともとあった召しという宗教的意味と、職業という世俗の意味という全く異なる二つの概念があることについてはすでに言及した。ここでベルーフにおける宗教的意味の召しの概念は、新約聖書のパウロが使っていたギリシャ語クレシスという語から引き出される。その意味は「召命（Berufung）の意味、すなわち永遠の救いのために神によって召される」である⁴³⁾。宗教改革以降、自分の職業において永遠の救いのために召されたという自覚をもっていたプロテスタントの信徒たちは、神によって定められた日常生活の秩序（職場）において来世を目標としてその職務に服従した。これはカトリック以上に人生を天国のための試練と苦難と実証の場所とみなした宗教改革の特徴であり、このように明確な来世観に深く根ざしているのがプロテスタンティズムの現世肯定であるといわれている⁴⁴⁾。言い換えれば、プロテスタンティズムの現世肯定の職業観というのは、魂の救済を目標とする来世観によってもたらされるものだということである。しかしながら、現代のキリスト教主義学校において非キリスト教徒の教職員たちをしてキリスト教の伝統的な来世観を身につけるようにすることは、異なる宗教観や世界観をもつ教職員の間で衝突を引き起こしかねない。そのため、「魂の救済」に関するキリスト教的来世観についてあまり触れられていないのが現状ではないだろうか。しかし、近年末期がん患者など死にゆく

43) 『プロ倫』原文、127頁（注56）。クレシスという語は「コリントの信徒への手紙一」1章26節をはじめ、いくつかのパウロの書簡の中に表れる。これらの聖書箇所において、この語は召命（Berufung）の純粹な宗教的概念と関わっており、その概念は今日（ヴェーバーの時代）の意味での世俗的な職業とは少しも関係がない。

44) エルンスト・トレルチ、前掲書、40、47-48頁。

人の様々な痛みや死後の世界への関心などを研究のテーマとする新しい学問の領域である「スピリチュアルケア学」や「死生学」などを通して、人間の死や死後の世界に関する普遍的なテーマを共有することによって、死後の世界への関心を引き出し、教職員それぞれの死生観を尊重することはできるであろう。それとともに、非キリスト教徒の教職員自身が、キリスト教主義学校で奉職しているという事実をとおり、自分が神に召されキリスト教的救済に導かれていることの自覚を促すことも可能ではないだろうか。もちろん洗礼と聖餐式以外のすべてのカトリック教会の sacrament を「魂の救済」の条件から外したカルヴァン派の「脱呪術化」（橋本努 152-156 頁）のようなこととして「脱教理化」を主張することには抵抗があるかもしれない。しかし、キリスト教の教理云々以前に、キリスト教徒の教員の減少する中で、キリスト教主義学校における職業観の確立ということで考えた場合に、少なくとも死後の世界や「魂の救済」への関心は、伝統的なプロテスタントのそれとは違うとしても、少しでもその心理的駆動力として機能する可能性は否定できない。

②「魂の余暇」：礼拝の空間

次に、キリスト教的職業観の確立の際、プロテスタンティズムに起因する否定的な側面を克服に向けた方策の一つの答えとして「魂の余暇」の必要性について考察する。マックス・ヴェーバーは『プロ倫』の最後のところで、プロテスタントの禁欲の精神が抜け、資本の獲得への関心しかない現代の資本主義システムを「鉄の檻」と表現する。この表現が示すのは、資本主義システムはもはやキリスト教的な精神によって支えられる必要がなく、営利の追求が競争の情熱と純粋に結びついたものであるという現状、そして、いつかそのシステムが終わる頃には精神のない専門人、心のない享楽人が現れるであろうという予測である（中山訳 490-494 頁、大塚訳 363-366 頁）。大塚久雄氏は、「精神のない専門人」と「心のない享楽人」を、心の貧しい人が大量に現れる「精神的貧困」の問題として捉える⁴⁵⁾。実際「精神的貧困」の問題を抱えている「鉄の檻」という資本主義システムにおいて経済活動の道具となった個人は、フロムが指摘したように、無力感、無意味、孤立、孤独、不安などに悩まされる。これらの問題はまさに生産性や労働力を絶対視する精神的貧困から生じるのではないだろうか。このような「精神的貧困」の問題に対し根本的に向き合えるキリスト教的な価値観は、世俗的次元を超えるものでなくてはならない。例えば、ヨゼフ・ピーパーが言う「魂の余暇」の重視という考え方である。

ピーパーによると、キリスト教的価値観におけるこのような余暇は、新しい労働のために肉体の休息や精神の回復として新しい活力を注ぎこむことにその意味と目的があるのではない。逆に余暇は、活動・努力・苦労・実益などだけに価値を認める労働の概念に反対して、肉体の労働機能に縛られた状態や狭い労働環境に閉じ込められた状態から解放させ、その労働世界を超えさせ、さらには神という究極的存在、最高の対象へ到達することを目指し、またそれを可能にする魂の根本的な能力の一つ

45) 大塚久雄『社会科学における人間』、岩波新書、1977、157-159 頁。

であるという（ヨゼフ・ピーパー『余暇と祝祭』67, 73-74頁）⁴⁶⁾。そして、自力（理性）によってではなく至福に気づかせる単純な直観⁴⁷⁾（知性、ひらめき）として余暇（賜物）を受け取ることができるという点を強調する。これは、余暇には神から与えられるという受動的な特徴があるということであるが（同上73, 76頁）、このような特徴を有する余暇を通して、人間は深い眠りのように元気づけられ、新たにされて、一日の仕事へと送り出されるようになるのである（同上74-75頁）。彼によると、労働が絶対化され、合理性と実益に支配されるようになった今日の社会において真の余暇を実現可能にするのは、神と交わる宗教的な祝祭である礼拝（Kult）の回復である。この礼拝こそが、尽きることのない富と豊かさの源泉であり、生命の源と支えであり、真の意味での人間性の回復と人間の解放をもたらすものだという（同上98, 102-105頁）。

プロテスタンティズムの影響によってもたらされた資本主義社会の様々な問題は、魂の余暇を可能にする礼拝（チャペル）をとおして癒され、その解決に向かった推進力が与えられると考える。そういう意味で魂の余暇をもたらす礼拝づくりは、労働に励む教職員をより内側から支える新しいキリスト教的職業観の確立に欠かせない部分だといえる。

③新しい研究領域「職業学」（仮称）の構築

今日キリスト教主義学校における肯定的世俗化の具現として、「魂の救済」と「魂の余暇」という部分をもってキリスト教的職業観の土台を据え、様々な研究分野との対話と連結を通して職業に関する新しい学問領域を開拓していくことができるのではないだろうか。これに関して同志社大学の「良

46) ヨゼフ・ピーパー著『余暇と祝祭』、講談社学術文庫、1994（1988）。ピーパーにとって余暇というのは、神や命の源など究極的存在、最高の対象に対して自らを開き、受け入れ、耳を傾けて、存在するものの内部に入っていく観想（Kontemplation）的行為である（67頁）。その意味の中には、本当の自分自身と一体になるとともに、創世記（1：31）の神のまなざし、神のコンテンプラチオのように、創造の世界を心の目でながめ、それらすべてを根本的に肯定し、世界と一致する態度をも含まれる。ピーパーは、このように世界を肯定し、世界と一致し、その中に包み込まれることを祝祭として理解する（70-71頁）。

47) ヨゼフ・ピーパー著「レジャーの基礎としての観想」松田義幸編『「ゆとり」について—ヨゼフ・ピーパーのレジャー哲学をめぐって—』、誠文堂新光社、1987。余暇を観想的行為として捉える『余暇と祝祭』の説明に加えて、ピーパーのこの資料を参考にせよ。余暇は人間の心と魂の状態、精神状態を意味する。このような精神状態は、観想（contemplation）に沈潜し、また観想を行いうる精神状態を示す。観想とは一種の認識行為であるが、観想は考える（推理する）ことによってではなく、見ることによって、すなわち直観によって得られる知の一形態である。それは論証する理性（ratio）と同格ではなく、単純な直観力である知性（intellectus）と同格である。直観とは、現に存在するものについての知識であり、至福をもたらす愛するものを直に見ることを意味する。キリスト教において直観の対象は神であり、死の彼岸においてこの神を見ること（visio）が究極の目標としての至福直観（visio beatifica）である（137-138頁）。

心学研究センター」が取り組んでいる「良心学」の構築⁴⁸⁾の試みに示唆に富んだヒントがあると考えられる。それを参考にすると、キリスト教的職業観の現代的な実現として、まず学内で宗教部の活動や新入教職員のオリエンテーションを通して「職業における召命意識と隣人愛」というプロテスタンティズムの中心的な思想を広める。それとともに、心理的駆動力としての「魂の救済」への関心と資本主義の様々な問題に対する一つの答えとなりうる「魂の余暇」の実践とがキリスト教的職業観の中に反映される必要があるという認識を共有する場を設ける。その上、このようなキリスト教的職業観に理解を示す「職業学」（または「天職研究」）という学際的な研究領域の土台を築き、徐々にその学術コミュニティを学外へ広げていく。こうして得られた研究成果を学内外で定期的に発表する機会を定める。このような取り組みは、キリスト教的職業観を広め、肯定的世俗化を実現していく一つの方法になるであろう。

7. おわりに

以上、マックス・ヴェーバーが理解したルターのベルーフ（天職）観念に潜んでいる肯定的な世俗化の精神を手掛かりとし、現代キリスト教主義学校におけるキリスト教精神の現代化または肯定的世俗化の具体的な形の一例、すなわち非キリスト教徒の教職員におけるキリスト教的職業観の確立について論じた。このような議論は、もはや止められない政治的・知的・個人的世俗化の波にどう立ち向かっていくべきかという問いと向き合う一考察である。そして、宗教改革がヨーロッパにもたらしたプロテスタンティズムの倫理的天職観の高い文化的意義がキリスト教主義学校においても生かされ、具体的な形へ発展することを願う筆者の小さな希望⁴⁹⁾がこの議論に潜んでいる。

48) 同志社大学は「キリスト教主義」「自由主義」「国際主義」を教育理念とし、創設者の新島襄の「良心」理解をその原点とする建学の精神を有している。これを「良心学」という学際的な研究領域とし、その成果を国内外に発信し、新たな学術コミュニティを形成しようとする目的で、2015年4月に良心学研究センターを設立するに至る。現在まで良心をキーワードとする様々な研究が行われ、毎年数回の公開シンポジウムが開催されている。次のサイトを参考にせよ。<http://ryoshin.doshisha.ac.jp/jp/>, https://www.doshisha.ac.jp/information/history/educational_ideal.html

49) この希望は、以前名古屋学院大学で定年退職したある教員の最終講義のときに彼のために筆者がささげた次の祈りの中にも表れている。「神様、長年本学の教育に携わり、数多くの業績を積んでこられた〇〇先生の最終講義を迎え、先生に敬意を払い、感謝の気持ちを表す時間を与えられたこと、心より感謝申し上げます。先生は神様に選ばれし者としてこのキリスト教主義大学で天職を全うし、神様の栄光につながるさまざまな活動にご尽力なさいました。今私たちはとても寂しい思いで先生を見送りたいと思いますが、先生の今後の研究活動とご健康とご家庭のうえに、神様の御恵みが豊かにありますように。そして、神様の見えざる手を通して先生の魂が守られ、導かれますように。皆様の願いと祈りを合わせ感謝してイエスキリストの御名によってお祈りいたします。」